

論文はいよいよ最後の修正に取り掛かり、3月30日までにワードで歴史学部の教育管理システムに提出することになっている。「終わり」にさしかかるにつれて、焦り、不安、覚悟、様々な感情が込みあがってきた。「終わる」から、喜べるはずなのに、私の心の中は複雑であった。

3月に入って、仲の良い友人に「論文を見てくれないかな」とお願いしたところ、「いま忙しいから」とあっさり断られてしまった。私は、「そうだよな。わかった！また論文終わったら一緒にバドミントンしようね！」と返したが、それから立て続けに二人の友人にもあっさり断られてしまったことは、私にとって心に大きな釘が刺さったようだった。

もちろん、相手には私を手伝う義務も責任もないから、断られても仕方のないことなのは十も承知なのだが、これまで、論文添削と内容についてのアドバイスのお願いについて、友だちから一度も断られたことのなかった私は、部屋に帰ると、ポロポロと涙を流していた。

「なんで最後になって誰も助けてくれないんだ」。悲しい気持ちは大きく膨らみ、一つの塊になって、胸を締めつけた「もう私にできることはやり尽くしたんだ。あとは中国語と、論文の中身について、先輩や友だちにアドバイスをいただいて、訂正を加えることしかできない。」そう決めきっていた私は、周りに支えてくれる人がいなくなってしまうことに不安を感じ、そして、「誰も助けてくれないなら論文はこれまでだ。」と自暴自棄になり、惨めな気持ちと、やりきれない気持ちであふてしまっていた。涙は、止めどなく流れた。

本当は、心の底から、諦めたくなかった。周りの方々のアドバイスと中国語の添削が必要なことは確かであったが、私自身に出来ることに、もちろん終わりなどなかった。私の戦いはまだ終わっていないことも、いまのプレッシャーを受け入れなければならないことも、わかってはいた。わたしは、論文の最終段階で、自分の限界を決めきってしまっていた。

締切を前に、論文以外にも大学に提出する書類やオンラインでの手続き、その一つ一つを確実にこなさなくてはならなかった。論文が本当に最後の段階に差し掛かるにつれて、卒業に関わる大事な手続きも自分ひとりではなくてはならない上に、論文の最終添削も終わっていない。そのプレッシャーのために何倍にも膨らみ、格段と難しく見えた。論文の最終修正も「これで

すべてが決まるのだ」と自分を脅すため、それらの試練をとてつもなく大きなものに捉え、それはのちに精神的な負担に変わり、更に自分に圧力をかけてしまっていた。

悲しみと、不安な気持ちは積もり積もって、自分ひとりでは耐えられなくなってしまっていた。思いっきり泣いて、母に話しかけてみたりして、自分に冷静になるようにうったえた。締切を前に、自分を見失いそうになりながら、でも取り憑かれたように論文のことだけは寝ても覚めても頭から離れなかった。

今思うと、乗り越えられる人達にとって、こんなことは当然で、なんのプレッシャーもいなくこなしていった段階だったのかもしれない。しかし、人に頼ることが得意で、甘えん坊で、精神的にも強くない私にとって、この最後の難関は、復旦に入る前のプレッシャーと同じくらい、いや、それ以上にはるかに大きかった。

そんな私に前を向かせ、現実に向き合うように支えてくれたのは、家族の支えと、「論文の重み」であった。この論文は、決して、私一人で書いたものではない。先生方の支えと、そして、10万字を越える論文のたたき台の段階から、中国語を添削し、辛抱強く私にアドバイスをくださり、支えてくださった友人と、先輩方とともに書いたものである。

彼らの支えがなければ、私の論文は永遠に、「おわりに」を書くに至ることができなかつただろう。その論文の重みを、友情の重みを感じた私は、何が何でもこの論文を完成させ、提出し、卒業を迎えなければならないと思った。

「日中友好の架け橋になる」そう誓って、三年前、ここ復旦大学に来た。それから二年間、架け橋になることはおろか、日本や中国のために何も貢献することができていない自分に気づき、自分自身に何度も落ち込んだ。しかし現在、私は、私が中国で書いたこの一本の論文こそが、日中友好そのものなのだと気づいた。

この論文は、私の観点と、先輩のアドバイスと、数え切れない友人による中国語の添削を重ねて、初めて完成することができたものである。この論文が学術的に、研究分野に対して大きな発展をもたらしたということは難しいかもしれない。でも、人生で初めて一つの学問の焦点に向かい合い、幾度となく友人に助けをもらい、苦しみもがきながら書き上げたこの論文は、私と私を信じ支えてくれた友人たちとの努力の「結晶」であり、ほかのなにものにも変えられない唯一の日中「友稿」である。この論文の重みが、私がどんなつらいときも、くじけても決して諦めないように、前を向かせてくれた。

暖かい場所

提出前の3日間は、夢の中で論文を提出してしまうほど、それだけをただ思って生きていた。食事をすることは第二、第三だった。朝起きるとパソコンをつけて論文を確認、お茶だけ飲み、午前11時まで粘り、お昼に食堂で二倍のお昼ご飯をお腹に詰め込んだ。なぜならそれがその日の最初で最後の食事になるからである。

この辛い間、私が「居場所」としていたのは、歴史学部行政課の職員室であった。ここは、修士一年生のときに私が一年間通った場所である。朝8時半に出勤すると、カートを引いて復旦本部全体の郵便集計所に行く。そして、歴史学部の注文しているその日の新聞と、先生方に届いたEMSや手紙、小包などをカートに詰め込んで、引いて帰って来ては、学部の先生方のポストにそれら郵便物を割り振る。多い時、作業は約1時間ほどかかる。

しかし毎回名簿を見ながら先生方のポストを探すため、歴史学部の先生方全員の名前とポストの大体の位置を一年目にして覚えることができたことは、その後の大学生活に役に立った。歴史学部の先生なら、お会いしたことはなくても、名前だけはしっかりと覚えている。

私がこの行政職員室に顔を出すと、李莉先生と王永剛先生が笑顔で迎えてくれた。私が、もうすぐ論文を提出すると告げると、「それは大事な時だね。この職員室で作業していいよ」と言ってくださった。二年前に私が座っていた席には、新しい学生が座っていた。私は、遠慮なく空いた席に座り、パソコンとにらみ合った。

この行政職員室は教務課職員室に近いので、聞きたいことがあった場合、すぐに聞きに行くことができる。私がそこで作業していると、顔見知りの先生がいらっしゃっては、私の顔を覗いた。新しくいらっしゃった先生が入ってくると、私を見て、「新しく来た助手ですか」といった。職員室の王先生は、「彼女は僕たちの職員室のOGだ。それも国際OGだ。」と説明してくださった。

職員室で働く二人の先生方は、私に場所を提供してくださったばかりでなく、わたしに心の「居場所」を与えてくださった。緊張でガチガチになった私の心に暖かい風が吹いたのを感じた。

食事の時間も惜しんで論文の格式を変えている私を見て、李莉先生は「えみ、食堂のごはんなくなっちゃうよ。ご飯食べてからまたやりなさい」と優しく私に言った。午後5時になって職員室も閉めなければならないため、私も片付けを始めると、王先生は、「もしここで引き続

き勉強したかったら、ここに残ってやるといい。帰るときは電気を消して、自動ロックドアを閉めるだけでいい。」とおっしゃってくださいました。

「あなたは私たちのところの一人だから。」二年前に働いていた私のことを今もなお覚えていて下さり、論文の最後にわたしに暖かな光を灯してくださいました李先生、王先生の優しさを、その言葉を、私は忘れることができない。私が始めてここで働き始めたとき、王先生は、復旦歴史学部の行政職員室で働き始めて四十五年とおっしゃっていた。

定年退職後も同じ場所、同じ机で働き続けている王先生は、復旦を誰よりも知っていて、歴史学部を誰よりも愛していることを、私たち学生も、そして先生方も知っている。その日の夜、私は11時まで職員室に残っていた。

春艶との出会い

3月20日、腫れた目で歴史学部の教育課の陳先生を訪ねた。一から十まで、手続きについて聞いて、その場でオンラインの必要事項を埋めていった。あまりにも何度も尋ねるので、しまいには、陳先生に、「また来たか」と言われてしまった。それでも辛抱強く先生が手の空くまで待っていると、「吉永英未、学籍番号は？」と聞かれた。

先生は教育システム上の手続きに漏れがないかしっかり確認してくださいました。私が6回目に職員室に入ってきた際には、「まったく。今日はあなた一人に尽くしたよ。」そう呆れたように言った。「厳しくて怖い」で有名な教育係の陳先生だが、実はとっても心の暖かい方であることを、私は知った。

3月21日、わたしは歴史学部の行政室と教務室を行ったり来たりしながら、パソコンで必要事項を打ち込んでいた。簡単な手続きも、自分ひとりでは合っているのか自信がない。中国語で書かなければならない部分は必ず、友人に確認してもらわなければならない。困った顔をしている私をみて、二年前に私のしていた仕事をしてる修士一年の学生が話しかけてくれた。同じ歴史学部の後輩の李春艶である。彼女はオンライン上で私が書いた情報を一つ一つ確認してくれた。彼女のおかげで、個人情報入力などの手続きを完了することができた。

論文はというと、文章は書き終わったが、文章全体の最後の確認と、論文のフォーマットや目次の挿入、参考文献の整理など、ワードを使いこなす作業が残されていた。とくに論文のフォーマットに誤りがあると、致命的なミスに繋がるため、慎重に慎重を重ねた。

しかしながら、パソコンが苦手なわたしは、初めての作業にとても自分ひとりではこなすことができなかった。仲の良い先輩の一人、李穎先輩は博士課程で、同じく今年卒業を迎える。そんな、ともに忙しい彼にも、わたしはお願いをしてしまった。

「明後日には提出しないといけないんだ。なのにフォーマットがまったくひとりでは調整できない。」
「えみのことなら、僕がたすけないとしょうがないね」理系の彼は歴史学部の文章はよくわからないけど、といいながらも、論文全体のフォーマットを調整し、目次など加えたあとはしっかりと大学の指定したフォーマットに変わっていた。

自分の論文もまだ完成していない中で、力を貸してくれた先輩に、感謝してもしきれない。

論文の文章の最終確認について、私が何度6万字の論文を読み返しても、もう文法や内容構成の間違いは見えてこない。しかし、論文の目次から結語まですべてを通して問題がないかどうか、いまだ確信は持てない。

私は、その日出会ったばかりの後輩春艶に遠慮がちに聞いてみた。「いま論文の最終確認の段階なんだけど、もしよかったら、ちょっとだけ見てもらえないかな？」この「ちょっとだけ」がのちに、3日間論文を見もらうことになる。春艶は、「わたし、時間あるから大丈夫だよ。」そう言って、それから提出までの3日間と半日、毎日私の部屋にパソコンを持って通った。

私は日本語の脚注や参考文献などを整理し、彼女は論文を最初から最後まで見直し、添削、さらに書式や段落、参考文献のチェックをしてくれた。先日出会ったばかりの彼女に、私を助ける義務などないのに、自分の時間と労力を犠牲にして、自分のことのように真剣に私の論文に編集を加えてくれている彼女を前に、私は目頭が熱くなることを堪えることができなかった。

天使のような彼女との出会いが、私を救った。それは、論文の中身の修正もそうだが、精神的に参って、ジタバタしていた私にとって、大きな心の支えとなった。彼女の無私の優しさに、「家族」のような繋がりさえ感じた。会ったばかりなのに、こんなにも人のために尽くせるものなのか。

3月25日